

## 徳島県におけるアカメの謎の回遊

海洋資源担当 池脇 義弘

Key word ; アカメ, 回遊, 水温

---

### はじめに

アカメ (*Lates Japonicus*) は、高知県・宮崎県などの沿岸・河口域を中心に分布する我が国の固有種で、名前はルビー色に輝く眼を持つことからきています。地元の水族館などに行かないと普通はお目にかかれない珍しい魚ですが、意外にご存じの方が多いのではないのでしょうか。それは、前述のような限られた海域にしか生息しないという希少性、成魚は 1m を超す巨体になることなどに魅せられて、釣りの対象として一部熱狂的なファンがいることや、主な生息場所の一つである高知県四万十川が、「最後の清流」として全国的に有名であり、その河口に棲む「幻の巨大魚」というイメージをもつことなどが一因かもしれません。

高知県、宮崎県以外には、北は静岡県から南は鹿児島県、瀬戸内海でも大阪府で見つかった記録があるようですが、まとまった数の幼魚の捕獲記録などから判断すると、主生息域は高知県・宮崎県で、その周囲の海域には回遊していったりして、点在して分布しているようです。しかしながら、散発的な知見が多く、その回遊生態や産卵場所などにはまだ謎が多く残されています。

主分布域の高知県のお隣である徳島県でも、県南部の海部沿岸域(図1)でアカメが獲れたという記録がいくつかあります。昔はアカメが棲んでいたという話もあるようですが、現在は、私の知る限りでは、まとまった数のアカメが定着して棲んでいるというような情報はありません。2005 年 5 月 20 日に阿南市の椿泊漁業協同組合の定置網でアカメが漁獲されました(写真)。

体長 61cm 体重 5.7kg の個体で、当初は、徳島県南部で稀にあるアカメの漁獲例の一つと思っていたのですが、漁協の職員の方にお話を聞いてみると、いろいろと興味深いことがわかってきました。

そこで今回は、椿泊周辺で漁獲されるアカメについてその漁獲実態と、それによって本種がどのような生態的特徴をもつことが推察されるかといったことについてお話しします。

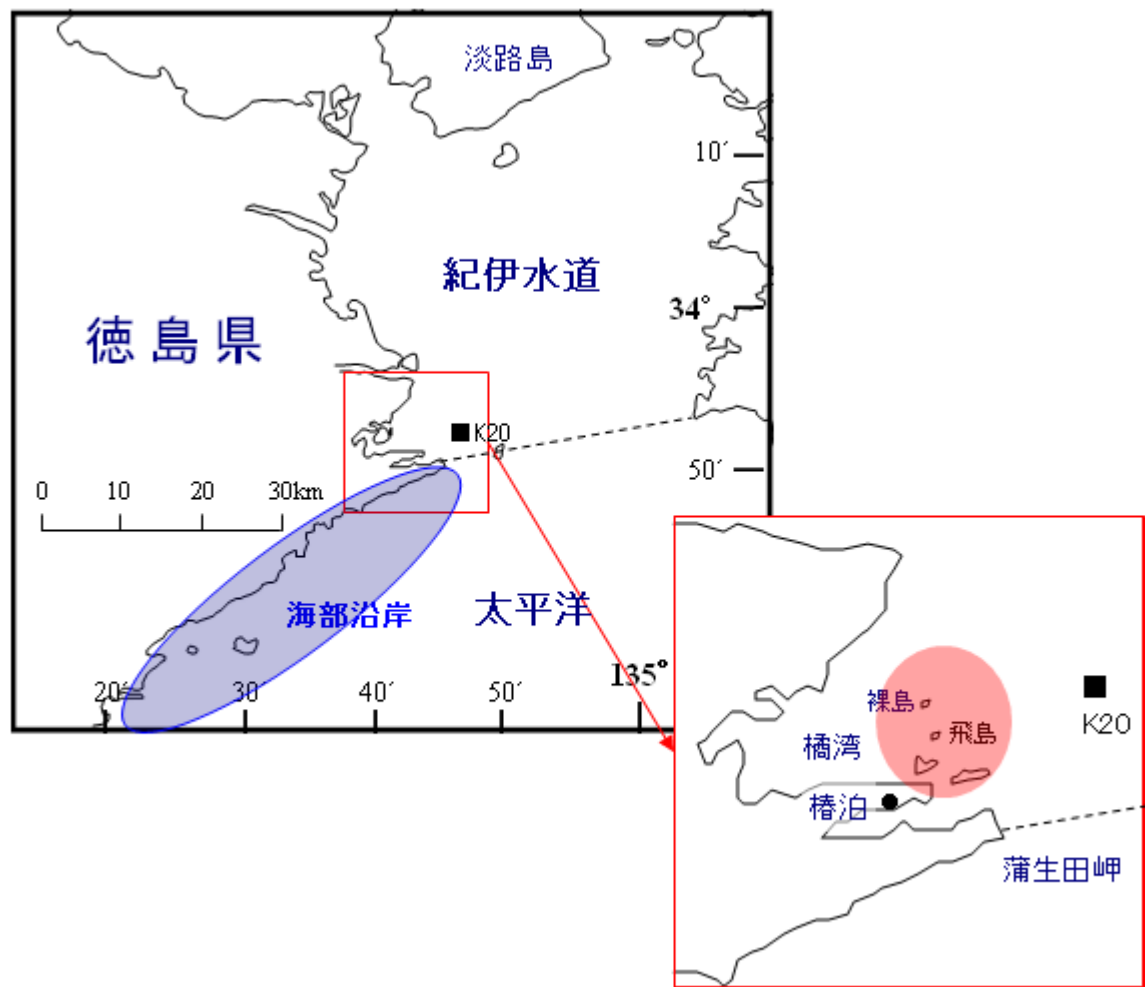


図1 徳島県の沿岸地図。青い網掛けで示したのが、これまでアカメの漁獲報告があった海部沿岸海域。赤い網掛けで示したのが、椿泊漁協でのアカメの漁獲海域。

■ : アカメの漁獲海域に最も近い海洋観測点 "K20"。

点線は紀伊水道(瀬戸内海)と太平洋の境界線。



写真 2005年5月20日に徳島県の椿泊漁協の定置網で漁獲されたアカメ。  
体長 61cm, 体重 5.7kg

## 椿泊におけるアカメの漁獲実態

椿泊漁協の定置網には、図1に示した海部沿岸海域側の最北部に位置する漁場があり、今回漁獲されたアカメもその辺りで漁獲されたものと思っていました。ところが、実際は蒲生田岬を回り込んだ紀伊水道側(図1に示した赤い網掛け部分)で漁獲されていました。しかも、漁協職員の話によると、アカメが獲れるのはいつも紀伊水道側に入り込んだ漁場の定置網ばかりだそうです。また、獲れるのは今回のように梅雨を中心とした期間で、何年か前には、まとまった数のアカメが一度に定置網に入ったこともあるそうです。

以上のことから、どこから来たのかはわかりませんが、6月前後の時期にアカメが蒲生田岬を廻って紀伊水道へと入って来ること、また、まとまった数の漁獲例もあることから、群れをなしている可能性もあることが推察されました。

## 回遊の要因は？

それでは、アカメは、なぜこの時期にこのような回遊をするのでしょうか。

アカメは暖海性の魚らしい分布域を持ち、本県はその北方に位置します。まず水温との関係はどうなのでしょう。

図2は水産研究所が実施している海洋観測調査で得られた、海部沿岸海域の平均表面水温と今回のアカメの漁獲場所に一番近い紀伊水道海域の調査定点"K20"(図1)の表面水温(ともに2001年から2005年の平均値)の季節変化です。

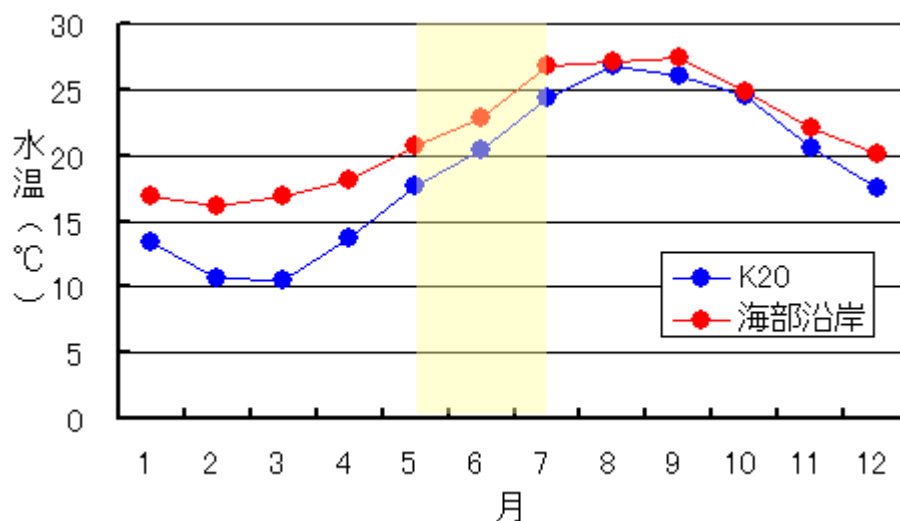


図2 海洋観測で得られた水温(0m)の月変化  
2001年から2005年の5年間の平均値

図2のように紀伊水道の冬季の水温は、海部沿岸に比べると最大で数度も低いのですが、夏季から秋季にはほとんど差がなくなります。そして、ちょうど梅雨前後(図2の黄色の網掛け部分)は水温の上昇期で、K20の水温も海部沿岸との差が小さくなり6月からは20を越えるようになります。アカメが回遊してくる時期は、海部沿岸から紀伊水道に向かっての水温低下の障壁が弱まり、アカメにとって好適な水温域が広がっているのではないのでしょうか。

ただ、水温が好適なだけでは回遊してくるメリットとはいえず、行く先に餌がたくさんあるとか、産卵場所があるとか他の要因もその生態的意義を述べるためには必要になってきます。本種は夏季に産卵するといわれていることから、この回遊が産卵活動に関連したものであることも考えられるのですが、前述のように本種の産卵生態についてはまだまだ謎が多く、今回得られたデータだけではこのことについては十分な検討をすることはできませんでした。

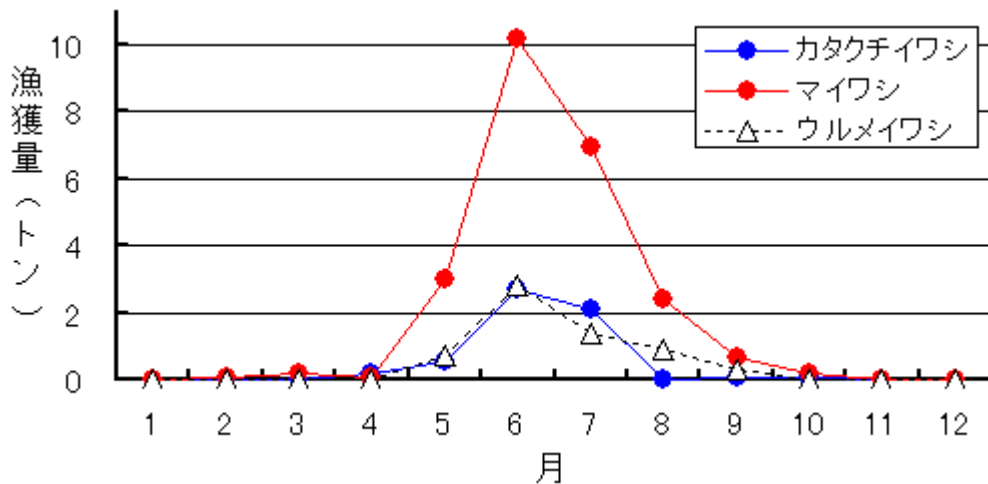


図3 樺泊漁協の小型定置網で漁獲されたイワシ類(3種)の漁獲量の月変化  
2001年から2005年の5年間の平均値

一方、餌の方はどうでしょうか。アカメは、成長するにつれて魚類を主に食べるようになります。そこで、樺泊漁協の定置網で漁獲される小魚について調べてみると、図3に示したように、魚食性の魚類の餌として「定番」であるイワシ類の漁獲の盛期がちょうどアカメの回遊時期と一致しました。ただし、回遊してくるアカメがイワシ類を食べているかどうかは調査をしていないので不明であり、全く別の種類の魚を食べているかもしれず「状況証拠」の段階です。この問題を解明するためには、今後、アカメの食べているものを実際に調査する必要があります。以上のように、なぜアカメが梅雨時期に紀伊水道へ回遊してくるのかということについて、関連ありそうな事象についてはいくつかピックアップすることができましたが、明確な回答を見つけることはできませんでした。謎は謎のままに残されました。やはり、もっとデータを集める必要があります。

### その他の情報

今回お話をお聞きした漁協の職員さんは、次のようなことも述べられていました。

まず、アカメの味についてですが、外見上似ているスズキに比べて「ずっと美味しい」ということでした。ただ、ごくたまにしか獲れないものなので一般の流通に乗りにくく、買い手がつきにくいそうです。ただ、地元の民宿がお客さんに出すための買ってゆく場合があるそうです。もしかしたら、梅雨時期にこのあたりの民宿に泊まれば、運がよければ「幻のアカメ料理」を食べることができるかもしれません。